

# 広仁会賞 第39回 内藤 裕之

題名：Increased blood pressure variability during the subacute phase of ischemic stroke is associated with poor functional outcomes at 3 months

(急性期脳梗塞患者における亜急性期の血圧変動は3ヶ月転帰と関連する)

発表誌：scientific reports・2020年・10巻(811)

…………… 《論文内容要旨》 ……………

血圧変動の増大は脳卒中後の転帰に影響を及ぼす可能性が報告されているが、脳梗塞の急性期では、反応性に血圧が上昇し、数日間はその影響が持続すると考えられている。従って、急性期の血圧変動が反応性の血圧上昇によるものか、真の血圧変動を反映しているかどうかを区別することは難しい。そこで、我々は急性期脳梗塞患者を対象に、反応性の血圧上昇の影響から脱した亜急性期に24時間自由行動下血圧測定（ABPM）で得られた血圧変動と急性期脳梗塞後の3ヶ月後転帰との関係を後方視的に検討した。

2010年4月から2018年3月までに当院および共同研究機関に入院した発症7日以内の急性期脳梗塞患者で亜急性期（中央値9日）にABPMを測定した連続症例を対象とした（626例、平均74歳）。発症前のmodified Rankin Scale（mRS） $\geq 3$ の症例は除外した。血圧変動は収縮期血圧（SBP）や拡張期血圧（DBP）の標準偏差（SD）、変動係数（CV）で評価した。3ヶ月後のmRS $< 3$ を転帰良好群、mRS $\geq 3$ を転帰不良群とし、患者背景因子や血圧変動指標との関連を検討した。対象患者の中で、497名の患者（79.4%）の3ヶ月後転帰を評価した。転帰不良群（n=184）では、転帰良好群よりも高齢で、男性の割合、Body Mass Index値が低く、慢性腎不全、心房細動が高頻度にみられ、喫煙は少なかった。入院時のNIHSS scoreは転帰不良群で有意に高かった。単変量解析では、24時間SBPやDBPの平均値は転帰と関連しなかったが、SBPやDBPの血圧変動とmorning surgeは有意に転帰不良に関連した。多変量解析にて患者背景因子で補正後もSBP-SD、DBP-SD、DBP-CV、morning surgeが転帰不良と有意に関連した。

急性期脳梗塞患者において、亜急性期の血圧変動の増大は3ヶ月後の転帰不良に関連した。